

第16号

2021年
6月発行

CONTENTS

問いを生むデータへ

国文学研究資料館 館長

渡部 泰明 ①～②

The Kaempfer Japanese Collection
in the British Library

大英図書館 東アジアコレクション長

ヘイミツシユ トツド

大英図書館 日本部司書

大塚 靖代(和訳) ③～⑤

史的文学データベース連携検索システムの
理念と未来

奈良文化財研究所都城発掘調査部

平城地区史料研究室 室長

馬場 基 ⑥～⑦

新日本古典籍総合データベースの文庫情報

白眉女子大学文学部 准教授

宮本 祐規子 ⑧

第六回日本語の歴史的典籍国際研究集会報告

古典籍共同研究事業センター

DOIって、なに? ⑨

古典籍共同研究事業センター

こんな古典籍があった! ⑩

〓 拠点大学古典籍画像紹介

トピックス ⑪

トピックス ⑫

ふみ

問いを生むデータへ

「日本語の歴史的典籍の
国際共同研究ネットワーク
構築計画」ニユーズレター大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

国文学研究資料館 館長

渡部 わたなべ泰明 やすあき

大きな注目を集めて始まった「日本の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」事業も、今年度で八年目となります。期待を越えて順調に進んだこのプロジェクトの後継計画として、ロードマップ二〇二〇に策定された「データ駆動による課題解決型人文学の創成」が、当館ホームページにも公表され、いよいよ始動します。そのつなぎ目にあたる、ぜひぶん大事な時期に館長の重責を担うことになったと、身の引き締まる思いです。

国文学研究資料館が閲覧事業を始めたころ、それはまた、文学とは何かを問いたいという、およそ無謀

な夢を携えて、私が国文学の研究を始めたころでもありません。文庫等を訪ね歩いて写本や版本を調査し、諸本を比較して正しい本文を見定め、図書館に閉じこもって関連する文献をあれこれ引っぱり出し、先行する研究論文を探し出しては山のようにコピーすることの繰り返しでした。一作品の、わずか数十行の本文に対して費やす時間と労力を実感し、これではいつになったら文学の真相を問えるやらと、気が遠くなりそうでした。

国文学研究資料館ができたお蔭で、そういう国文学研究に関わる書物探索の時間は驚くほど短縮できました。短時間で詳細な本文情報やさまざまな関連文献の情報が手に入る、私にとっても実にありがたい存在でした。現行のネットワーク計画は、画像を中心にそれを大規模に展開してきましたが、後継計画はさらにこれを加速し、高度化することになります。

「データ駆動」は、関連する情報を連動して入手することを可能にします。逐一調べ直す必要があった位相を異にするデータが、ワンストップで手に入るようになるわけです。

調査を進めていると、芋づる式に情報が得られることがあります。そしてふいにその「芋づる」をたぐる手が軽くなる時があります。次々と物事がなだれ込んできて、事柄の深層に引き込まれる感覚。何かが分かったというより、何を問うべきかが鋭角的に形になる瞬間です。いうまでもなく、この「問い」こそ、研究に欠かせないものです。問う私たちは現実社会を生きる存在にほかなりませんか

ら、問いは研究の意義づけに関わります。「データ駆動」は調査を高度化・加速化するだけでなく、この問いの場を用意するところに真骨頂があります。

現行事業から後継計画へと進めることによって、現代社会を生きていくことと、古典という莫大な文化的遺産とがどうつながるのか、新しい答えへとつなげていきたいと思っています。

※データ駆動による課題解決型人文学の創成プロジェクト
<http://lab.nijl.ac.jp/humanitiesthroughddps/>



※同プロジェクトパンフレット

<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/images/datakundou.pdf>



ケンペル日本コレクションより

新日本古典籍総合データベースで公開予定

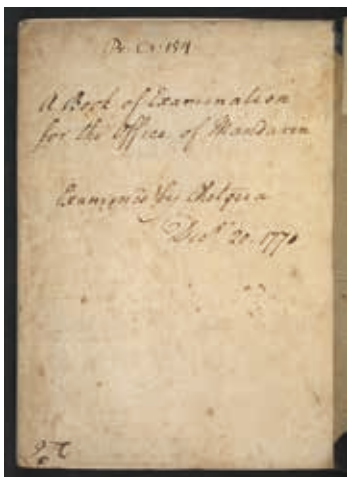


Nagasaki ezu An illustrated map of Nagasaki'. Printed c.1680 (ex Kaempfer, British Library Or.75.g.25)
長崎絵図 1680年頃(ケンペル旧蔵 大英図書館 Or.75.g.25)



Front cover and first page of Kōchi Hōin godenki. The latter bears a slightly different form of the title -Kōchi Shōnin -which Kaempfer has transliterated as Kootsi Foin (ex-Kaempfer, British Library Or 75.g.23(1))

越後國柏崎弘知法印御博記 表紙、及び本文初項
表題紙書き入れのローマ字後半部に Kōchi Shōnin、
ケンペル自身がローマ字化した Kootsi Foin と差異
あり。
(ケンペル旧蔵 大英図書館 Or 75.g.23(1))



"A book of examinations for the office of Mandarin". Misidentification by Chetqua of a collection of Kanzeryū utaibon (ex-Kaempfer, British Library Or 75.f.28)

Chetqua による見識録に基づく記載例。"A book of examinations for the office of Mandarin (科学試験本の類)"と明らかな内容誤認が生じている。観世流謡本 (ケンペル旧蔵 大英図書館 Or 75.f.28)



Dōchū kaibun ezu. Showing transcriptions of place names in Kaempfer's handwriting (ex-Kaempfer, British Library Or 75.f.7(3))

諸國安見回文之繪圖
ケンペル自筆のローマ字による地名読みの書き入れあり。
(ケンペル旧蔵 大英図書館 Or 75.f.7(3))

The Kaempfer Japanese Collection in the British Library

Hamish Todd

Head of East Asian Collections, The British Library

The British Library is the national library of the United Kingdom. It was created in 1973 by the British Library Act 1972 by bringing together the British Museum Library and various smaller bibliographic organisations. Through the legal deposit system it receives a copy of every publication produced or distributed in the UK. Its collection of over 170 million items includes materials from every age of written civilisation and 3 million new items added every year.

The British Library's holdings of material written in Japanese include approximately 4,000 early woodblock-printed works and 400 manuscripts. The majority of these were collected by four individuals: the physicians Engelbert Kaempfer (1651-1716) and Philipp Franz von Siebold (1796-1866), the diplomat Sir Ernest Mason Satow (1843-1929) and the surgeon William Anderson (1844-1900). This material was transferred from the British Museum to the British Library on its establishment in 1973 and today they form part of the Library's Asian and African Collections.

The first of these Japanese collections were some forty-five works formerly belonged to Engelbert Kaempfer, author of celebrated *The History of Japan*, published in 1727. Kaempfer was a German physician employed by the Dutch East India Company. From 1690-92 he served as medical officer in the Dutch trading factory on Deshima, the artificial island constructed in Nagasaki Bay by the Tokugawa government to house the foreign merchants. During his time in Japan Kaempfer amassed a large number of books, manuscripts, paintings, botanical drawings and artefacts, which he used as sources for his writings following his return to Europe. Between 1723 and 1725, some years after Kaempfer's death, his family sold his collections, notebooks and papers to the polymath Sir Hans Sloane. When Sloane died in 1753, his vast collections became part of the newly established British Museum and the Kaempfer material thus became one of its foundation collections.

Kaempfer's Japanese collection comprises chiefly maps, dictionaries, travel guides, chronologies, directories and popular literature, including historical novels, poetry and Joruri texts. At first sight, they are not remarkable in themselves, being mostly small in format and ephemeral in subject matter, typical of the printed material that would have been readily available while Kaempfer was in Japan. However, with the passage of time, they have acquired a rarity value and bibliographical interest since few such items are extant in Japan. The numerous annotations in Kaempfer's own hand in many of these books bear witness that these were his working library for his published works and give an insight into his understanding of Japan and its culture.

For many years, his Japanese books lay among the Japanese collections of the British Museum, virtually unrecognised and unappreciated. As notes in a number of the books reveal, in December 1770 a Chinese model-maker living in London named Chetqua examined them with a view to identifying their contents for the Museum. As he had no knowledge of the Japanese language, Chetqua frequently simply guessed at the subject of the books, often with surprising or humorous results.

As well as printed books and maps, the collection also includes a group of seven archival documents, which shed light on Kaempfer's life in Deshima. Among them are a paper copy of a pass allowing entry to Deshima and a contract guaranteeing the good conduct of Kaempfer's student servant. This document reveals the identity of the servant whom Kaempfer had credited anonymously in the preface of the *History of Japan* with risking his own life to help him obtain the books and materials he needed. The young man was none other than Imamura Gen'emon (Eisei) 今村源右衛門(英生) (1671-1736) who rose to become chief interpreter (*Ōtsuji*) and to play an important role in Dutch-Japanese relations.

The British Library is delighted that through collaboration with the National Institute of Japanese Literature, digital images of Kaempfer's collection of Japanese material will be made available online to researchers around the world.

大英図書館ケンペル旧蔵日本古典籍コレクション

大英図書館 東アジアコレクション長

ヘイミッシュ トッド

(和訳 日本部司書 大塚 靖代)

英国の国立図書館である大英図書館は、1972年大英図書館法の下、大英博物館図書館をはじめとする、国の様々な図書関係組織を統合する形で、1973年に設立された。所蔵資料は世界中の言語と年代を網羅する1億7000万点を超え、毎年300万点の新規資料を収蔵(納本を含む)し続けている。

大英図書館が所蔵する日本古典籍資料は、おおよそ4000点の木板本と400の写本によって構成される。これらの大部分の成立経緯は著名なコレクターに辿ることができる。すなわち、医師であったエンゲルベルト・ケンペル(1651~1716)とフィリップ・フォン・シーボルト(1796~1866)、外交官アーネスト・メイソン・サトウ卿(1843~1929)、そして外科医であり同時に日本美術愛好家であったウィリアム・アンダーソン(1844~1900)の4名である。1973年の大英図書館開館時には、大英博物館図書館に納められていた日本古典籍類は、新図書館に移管されることになり、現在は大英図書館アジア・アフリカ部が所蔵する。

まず最初に大英博物館に収蔵された日本語コレクションは、1727年出版された『日本誌』の著者であるエンゲルベルト・ケンペルが収集した45点の資料群であった。ケンペルはドイツ人医師でありオランダ東インド会社に雇われていた。1690年~1692年の間、彼は徳川幕府統制下にあった長崎出島にてオランダ商館付き医師として勤務していた。ケンペルは日本滞在時に多数の書籍、写本、絵画、植物写生、芸術品を集め、ヨーロッパ帰国後、著作執筆の資料としてそれらを活用した。1716年のケンペル死去後、おそらく1723~1725年の間に彼の遺族によって、ケンペル自筆のノートや書類を含むコレクションが稀代の好事家であったハンス・スローン卿に売却された。スローン卿の死後、彼の個人コレクションは1753年設立された大英博物館に移管された。

ケンペル日本コレクションの内訳は地図、辞書、案内記、年代記、年鑑、軍記物を含む物語類、さらには詩歌、浄瑠璃本などと多岐に渡る。一見これらには著しい特徴もなく、概ね小型の板本資料によって体をなしている。しかし、これらこそがまさにケンペルが日本滞在時に容易く入手できたものなのである。また時が経つにつれ、一部資料は日本での所在が稀となり、書誌学的貴重度が高くなったものもある。ケンペルが収集した資料には本人自筆による書き込みが残され、執筆のために一次資料として大いに活用していたことが認められる。また、そこからケンペルの日本とその文化に対する見識と理解を窺い知ることができるのである。

さて、ケンペル日本コレクションは大英博物館に収蔵された後、長らく日の目を見ることがなかった。博物館の試みとして1770年12月、当時ロンドンに滞在していた中国人彫塑家のChetqua(譚其奎)にコレクションの概要を明らかにすることを求めた事例が残されている。Chetquaには日本語の知識がなかった故に彼のコメントは推定の域に止るが、時として驚くべき、あるいはユーモラスな見識録が記録されている。

なお、ケンペル日本コレクションには七通の古文書類が含まれ、例えば、出島門鑑(通行許可書)から、ケンペルの当時の生活を垣間見ることができる。ケンペルは著作『日本誌』の序文中、身を挺してケンペルのために書籍や資料を集めた日本人助手の並々ならぬ努力に触れている。この助手が何者であるか判明したのは、ケンペルの残した助手に対する「請状之事」に、後に大通詞となり日蘭関係の要として活躍した今村源右衛門(英生)(1671~1736)の名が記されていたからである。

大英図書館としては、国文学研究資料館と日本古典籍資料の共同研究に取り組むことは永年の宿願であった。まずケンペル日本語資料のデジタル化に取り組むこととなり、近い将来、世界中の研究者に向けて、オンラインで情報発信できることを心から楽しみにしている。

〔研究開発系共同研究〕

史的文字データベース連携検索システムの理念と未来

奈良文化財研究所都城発掘調査部平城地区史料研究室 室長

馬場はば

基はじめ

開発の経緯

二〇二〇年一〇月に公開された「史的文字データベース連携検索システム」はご存じだろうか。このデータベースの、開発時における動機は、泥臭い木簡読解現場での、切実な欲求だった。

奈良文化財研究所(以下奈文研)では、発掘調査で日毎出土する木簡の文字を、日々読んでいる。一三〇〇年に及ぶ「土中ライフ」によって木簡の墨痕は薄れ、時に破損する。要するに、木簡の文字は読みにくい。だから、字形のサンプル集が必須となる。そこで、木簡の文字画像を集めた木簡字典データベースを開発したのだった。

同時期に、東京大学史料編纂所(以下編纂所)が「電子くずし字字典」を開発したのも、同様の事情による。この二つのデータベースは、しばしば相互に参照された。ならば一度に検索できたら便利ではないかということ、二〇〇九年に連携検索システムを開発・公開したのである。この連携検索は、史料読解の基本的ツールとして今なお広く利用されるに至っている。

連携検索は、文字読解の深化や研究ノウハウの交流など、大きなシナジー効果を生み出した。また、漢字字体規範史研究(HZG)グループや、海外の研究機関など、この連携を期に新たな交流が始まった。こうした中、国立国語研究所(以下国語研)から、国文学研究資料館(以下国文研)で開始されている歴史的典籍NW事業の情報もたらされたのである。

歴史的典籍NW事業では、人文学研究において、大量の資料の研究資源化の意義、すなわち将来的なデータ駆動型研究実現という目標が、すでに明示されていた。そして、汎用性、公開性といった要素の重要性が強く打ち出されていた。この歴史的典籍NW事業との出会いによって、泥の中から蓮の花が咲き、連携検索は新しいステージに入ったのである。

新たな連携体制における方向性

この新しいステージでの連携検索を模索する中で、あらゆる研究機関や利用者に「開かれている」、「参加機関は「対等である」、「継続的である」という三つの根本理念に行き当たることとなった。そして、この理念に則った連携検索を具体的に実現していく方法を検討する中で、三つの理念に基づく「研究資源の共有と連携検索のフレームワーク」の構築を目指そうとする方向性に辿り着いたのである。フレームワークは以下の様になっている。

1 「理念」の宣言

宣言文「IIF(International Image Interoperability Framework)に基づく歴史的文字研究資源情報と公開の指針」を公表。データはオープンデータとする。

2 東アジア漢字文化圏における史的文字情報化仕様の提案「オープンデータに関する仕様(第一版)」を公開。この仕様は、今後の研究や連携に進展に対応しての改訂・バージョンアップ

を期している。

3 公開データ作成

右記に基づくHIIJデータを賛同各機関が公開。各機関がそれぞれ検索機能を用意しても良いとした。

4 史的文字連携検索システムの開発

公開データの連携検索システムを開発。また開発用APIを開いて新規参入を促進。

このフレームワークの検討には国内外七機関(奈良文化財研究所・国文研・国語研・京都大学人文科学研究所・中国社会科学院歴史研究所・中央研究院歴史語言研究所／数位文化中心)が参画し、実施には現時点で六機関(右記より社会科学院を除く)が参加している。

成果と課題

二〇二〇年一〇月の「史的文字データベース連携検索システム」公開は、前記4に該当するものである。現時点での達成点は以下の通りと考えている。

① 各機関の独自性を尊重した対等な連携検索の実現

参加各機関がデータを保持・公開し、それを共通に検索する、対等で開かれた枠組みを構築。東アジア漢字文化圏最大の文字コレクション(紀元前後〜十九世紀・データ総数約一五〇万件)を実現。なお、各機関の検索機能と、連携検索システム側の役割分担を行うことで、世界でも初めてのHIIJデータの本格的検索を実現し得たと自負している。

② 国際的な標準規格に準拠した枠組み構築

HIIJ規格に準拠しつつ、漢字画像にカスタマイズした仕様により、国際的な枠組みを構築。また検索システムの仕様・API公開(中研院はこれに基づいて独自サイト開設)。

③ オープンデータ化も含めた利便性の向上

連携検索画像等はオープンデータで、自由な二次利用が可能(Creative Commons CC BY-SA相当)。すなわち、東アジア漢字文化圏最大規模の文字コレクションの、オープンデータとしての提供を実現。なお、各機関のデータベースでの知的所有権は、各機関の方針により、機関ごとの独自性を尊重している。今回の取り組みは、これからの人文学研究分野での多機関連携による研究資源化および研究資源共有の強化、それらを駆使してのデータ駆動型研究につながる、重要な成功事例(考え方・方法・手順等)になるはずである。今後、さらに多くの機関に参画を呼びかけて連携の拡張を図りつつ、ポータルが多様化・高度化を積み重ね、学術資源としての文字画像データを蓄積・オープン化・発信していく。期待していただければ幸いである。



史的文字データベース連携検索システム
<https://mojiportal.nabunken.go.jp/>

新日本古典籍総合データベースの文庫情報

白百合女子大学文学部 准教授

宮本 みやもと

祐規子 ゆうきこ

本稿では、歴史的典籍NW事業に関連するコレクションを紹介したい。本稿で取り上げたコレクションは「新日本古典籍総合DB」にて公開されている。

・東北大学附属図書館 狩野文庫(文庫番号THKL・THKK、公開点数三三三、略称狩野文庫)

本文庫は、明治の思想家・哲学者・教育者として有名な狩野亨吉(一八六五―一九四二)の旧蔵書コレクションで、東北大学を代表するコレクションである。

狩野亨吉は、第一高等学校の校長、京都帝国大学文科大学の初代学長を務め、理系・文系どちらにも造詣の深い学者であった。夏目漱石と親しく、友人代表として弔辞を読んだエピソードでも知られる。(本文庫中には、この弔辞の下書きが含まれている。)

彼は熱心な蒐書家でもあり、その十万点以上に及ぶ旧蔵書は、文学・哲学・科学をはじめ美術、兵学などあらゆる分野に及ぶ。その充実した内容から「古典の百科全書」「江戸学の宝庫」として世界的にも著名な



『餅蓬菜之圖』

書誌ID:100306879、DOI:10.20730/100306879
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100306879/viewer/6>

本文庫は、今後も順次公開されていく予定である。是非活用戴きたい。

コレクションである。戦前より国宝に指定されている中国と日本を代表する歴史書『史記 孝文本紀』『類聚国史 卷第二十五』の二点をはじめ、和漢古典の未刊本なども多く、貴重なものが幅広く収集されており、その質の高さ、幅の広さに感嘆させられる。

「新日本古典籍総合DB」では、まずは料理関係の書籍を中心に公開を始めている。精進料理・卓袱料理・阿蘭陀料理から豆腐・大根・鯛などの素材別、或いはお菓子、と料理関連書も非常に幅広く収集されている。



『菓子譜』

書誌ID:100306913、DOI:10.20730/100306913
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100306913/viewer/10>



『菓子雛形』

書誌ID:100306912、DOI:10.20730/100306912
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100306912/viewer/40>

第六回日本語の歴史的典籍国際研究集会・報告

古典籍共同研究事業センター

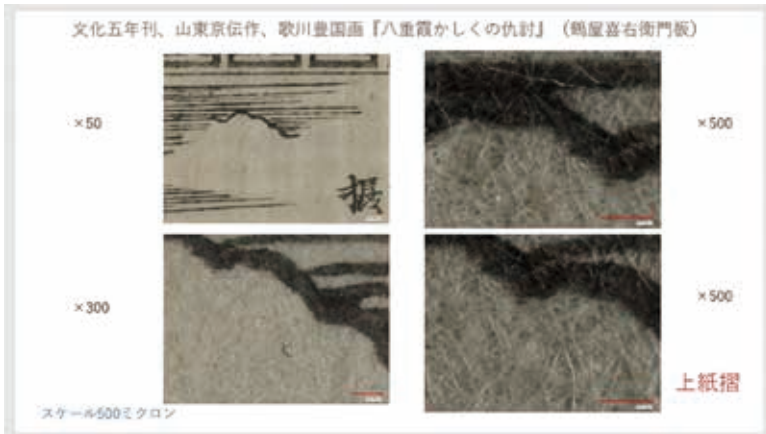
令和二年十一月七日(土)に、第六回日本語の歴史的典籍国際研究集会を開催しました。今回は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、初のオンラインによる開催となりました。

今回のプログラムは「デジタル人文学の可能性と未来」という全体テーマの中に、三つのセクションを設定しました。

セクション①では「NW事業から後継計画へ」のテーマのもと、海野圭介当館研究部教授、宮本祐規子当館古典籍共同研究事業センター特任准教授の二名から「歴史的典籍NW事業の現在と未来」と題し、ロードマップ2020-20に策定されたNW事業の後継計画について説明しました。

続いて、佐藤悟実践女子大学文学部教授による「上紙摺と上製本—合巻研究への高精細デジタルマイクロスコープの利用—」の発表が行われました。本発表に関連した内容の共同研究を、二〇二一年度から実践女子大学と実施していきます。

セクション②「デジタル源氏物語」の構築と展開」では、東京大学が公開している「デジタル源氏物語」の取組みについて、田村隆東京大学大



佐藤悟氏による発表
「上紙摺と上製本—合巻研究への高精細デジタルマイクロスコープの利用—」

学院総合文化研究科准教授、中村覚同大学史料編纂所前近代日本史情報国際センター助教、中村美里同大学附属図書館情報サービス課資料整備係長、永崎研宣人文情報学研究所人文情報学研究所門下研究員の四名による発表が行われました。一般市民にも馴染みが深い源氏物語に関係する取組みがテーマということもあり、質疑応答では参加者から多数の質問が寄せられました。

セクション③では、「若手研究者からの提案：テキストマイニング—KH Corderを中心—」として、三名の若手研究者による発表が行われました。発表テーマは「人文学における探索的データ分析」(小風尚樹千葉大学人文社会学系教育研究機構助教)、「公文録目録の量的分析—明治十四年頃の財政を中心に—」(福田真人東京大学大学院人文社会学系博士課程)、「中国・北魏の石刻史料(墓誌)を用いたKH Corderによる分析と文化的社会集団の復元」(大知聖子名城大学理工学部助教)と、バラエティ豊かなセクションとなりました。

当館YouTubeチャンネルで実施した本研究集会のライブ配信は、最高同時接続者数が一九四名に達し、これからの人文学研究について研究者や大学関係者の関心度の高さを伺えるものとなりました。

本研究集会のアーカイブ動画及び発表資料は国文学研究資料館歴史的典籍NW事業ホームページ内の特設サイトに現在も掲載しています。どうぞご視聴ください。

<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/sympo2020.html>
また、第七回日本語の歴史的典籍国際研究集会を令和三年十一月十一日(木)にオンラインにて開催予定です。

※文中の所属・役職名は開催当時のものです。

〈イベント報告〉

DOIって、なに？

古典籍共同研究事業センター

新日本古典籍総合データベースで検索し、古典籍の画像をみていると、右横に書誌データなどが併記されています。そのなかにDOIという項目があり、なにやら数字が列記されているのはご存じでしょうか。研究者のなかには、論文などで既にご存じかもしれませんが、このDOIをどう使ったら良いのか、使った経験がある方は少ないのかもしれませんが。使い方次第で、大変便利なデータとなるはずです。

DOIは「Digital Object Identifier」の頭文字からなります。ウェブ上のデジタル文献(論文や研究資料)と一対一に対応するように付与された、国際的なデジタルオブジェクト識別子です。Microsoft EdgeやFirefoxなどのブラウザに入力すると、文献等の所在情報(URL)に変換されます。URIは、皆さんもご存じのURL(ウェブ上の住所)と、ウェブ側で認識される名前とからなるとお考えください。

新日本古典籍総合データベースで公開している特定の典籍画像をみるためには、ウェブ上に表記されるURLをおさえておくことが必要ですね。ところが、ウェブサイトは、なんらかの理由で変更されることも多く、URLの変更などが生じがちです。いわゆるリンク切れは、こうして発生します。

DOIは、そうした事態を回避できる仕組みです。サイトのURLが変わっても、DOIは変わりません。ウェブ上のデジタル文献を、DOIを使って管理すれば、常に同じURLでアクセスできる仕組み(本来のURLへの転送)が作られるのです。たとえば、研究者が論文などを執筆するとき、「新日本古典籍総合データベースを利用した

／参照した」として、URLを記載されることでしょうか。しかし、十年、二十年という時間の経過と共に、何らかの事情でそのURLがリンク切れとなり、結局どんなデータ・データベースを利用したのか、当代の読者には判らず、検証することが出来なくなったら、不便この上ないことと思います。論文にせよ、研究データにせよ、検証可能性の継続が最も重要なのです。

すべてのDOIを管理し、URLの転送を行っているのは国際DOI財団であり、国文研は、日本で唯一のDOI登録機関ジャパンリンクセンター(JALC)の正会員として、古典籍一点ごとに付与しています。たとえば国文研所蔵の『伊勢物語』は相当点数にのぼりますが、このDOIを明示することで特定出来るのです。DOIは、各機関固有番号を示す prefix(プレフィックス)と、個々のコンテンツを特定する suffix(サフィックス)とを「/」(スラッシュ記号)で繋いだ形になっています。DOIの前に「https://doi.org」を付けることにより、URLとして機能します。国文研の prefix は「10.20730」であり、国文研が撮影、提供を受けた他機関所蔵の古典籍にも付与しています。研究データを保管管理している機関のみ付与でき、永久に維持することに責任を持つている証でもあります。

研究者は、論文などでどのように記述したらいいのでしょうか。論文本文や註などに「DOI : 10.20730/200023596」などと書く、あるいは近年は「https://doi.org/10.20730/200023596」とすべて記載することが推奨されています。国立国会図書館デジタルコレクションにもDOIが記載されています。その何コマ目という限定をする場合、その旨併記が親切です。

こんな古典籍があった！〜拠点大学古典籍画像紹介〜第8回

歴史的典籍NW事業では、二〇一五年度から、拠点大学における古典籍の撮影を実施しています。新日本古典籍総合データベースで公開された古典籍から、各大学おすすめの一点をご紹介します。

●立教大学図書館所蔵『安政雑志(あんせいざっし)』

URL: <https://doi.org/10.20730/100289184>

血飛沫が飛ぶ凄惨な事件やその挿絵が目を引くものの、調練のまねをする狸等ユーモラスな記事も散見される本書は、『藤岡屋日記』を典拠のひとつとする安政年間の奇談集である。

立教大学図書館所蔵の江戸川乱歩旧蔵本のみの孤本と見られていたが、近年の調査によって、筆致や記載順序などから名古屋大学附属図書館所蔵『浮世珍説録』が本書の模写本であると確認された。幽霊や転生など、不可思議なものに対する当時の認識も興味深い。



(該当部分を見る[右]: <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100289184/viewer/18>)
(該当部分を見る[左]: <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100289184/viewer/19>)

●慶應義塾大学三田メディアアセンター(慶應義塾図書館)所蔵『二條家中興御俳諧式(にじょうけちゅうこうごはいかいしき)』

URL: <https://doi.org/10.20730/100305789>

五撰家の一つ二条家において、寛政二年(一七九〇)九月五日に、宗匠加藤暁台を召して行われた俳諧の会を記録した資料で、「二条家御中興／御殿之俳諧」という書名でも知られる。当日の献立、調度品、座席図、二条治孝の発句「思ふそよしるへの松に 秋の月」に続き、暁台らの俳人によって唱和された連句などが記されている。大阪商船株式会社役員等を歴任する傍ら、俳人として活躍した奈良鹿郎(一八八九〜一九六〇)の旧蔵書「奈良文庫」に含まれる資料である。



(該当部分を見る: <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100305789/viewer/8>)

※画像の転載や翻刻掲載などを希望される場合は、利用条件のページ(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/usage.html>)を必ずご確認ください。

イベント開催予定

■第七回日本語の歴史的典籍国際研究集会

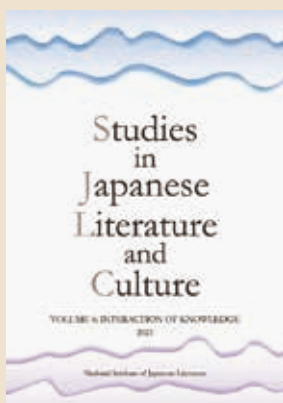
〔開催日〕二〇二一年十一月十一日(木)

〔開催方法〕オンライン方式

プログラムの詳細情報等は、ホームページに掲載いたします。

英文オンライン・ジャーナル第四号刊行

Studies in Japanese Literature and Culture の第四号「Volume 4: INTERACTION OF KNOWLEDGE2021」を歴史的典籍NW事業のウェブサイトで三月末に刊行しました。



<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/sjlc.html>

右記URLから全冊がダウンロード可能です。個別論文のみダウンロードする場合は、各論文のPDFアイコンをクリックしてダウンロードしてください。

国文学研究資料館と慶應義塾大学附属研究所斯道文庫との間でデータベース構築に関する覚書を締結

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫と、覚書を締結しました。

今後、斯道文庫が所蔵する貴重資料のデジタル化を進め、「新日本古典籍総合データベース」より公開してまいります。

仙台郷土史と伊達家稀覯本を伝える貴重古典籍デジタル公開へ

仙台市民図書館より同館が所蔵する古典籍(江戸時代以前の本)のデジタル画像五二八点の提供を受け、二〇二一年三月九日に「新日本古典籍総合データベース」で公開いたしました。



「海國兵談」仙台市民図書館所蔵

「データ駆動による課題解決型人文学の創成」プロジェクトのWebページを開設

文部科学省の「学術研究の大型プロジェクトの推進に関する基本構想ロードマップの策定—ロードマップ2020—」に人文社会系で唯一策定された歴史的典籍NW事業の後継プロジェクトである「データ駆動による課題解決型人文学の創成プロジェクト」のWebページを開設いたしました。概要を解説したパンフレットもダウンロード可能ですので、ぜひご覧ください。



<http://lab.nijl.ac.jp/humanitiessthroughddps/>
歴史的典籍NW事業Webページからもアクセス可能です。

新日本古典籍総合データベースのお知らせ

新日本古典籍総合データベースでは、目次となる「見出し語」、画像の文字をテキスト化する「翻刻」、挿絵などの「図像」を中心に、検索のために鋭意《タグ》を付与し続けています。検索の際にご利用いただければ幸いです。

ふみ 第17号は、

令和3(2022)年

1月発行予定です。

■表題の背景色は若苗色(わかなえいろ)です。若い苗のような黄緑色のことで、平安時代から夏の色として使われてきた伝統的な色です。『源氏物語』の「宿木」では「若苗色の小袷着たり」と書かれています。

■本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の『方丈記』(本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本)を利用しています。

■表題「ふみ」の書体は、石川島造船所(現IHI)創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」(活版印刷見本帳)を利用しています。

ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター 第16号

〈発行日〉

令和3(2021)年6月30日

〈編集・発行〉

国文学研究資料館

古典籍共同研究事業センター

〒190-0014

東京都立川市緑町十一三

TEL 050-5533-2988

FAX 042-526-8883

<http://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>



「瘍科精選図解」がご覧いただけます。携帯電話又はスマートフォンのアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。